修士論文要旨

児童養護施設入所児童の問題行動についての考察
－職員の共感疲労・バーンアウトとの関連－

別府大学大学院　文学研究科　臨床心理学専攻
修士課程　M1514003　小野さやか

本研究では，第 1 に児童養護施設入所児童はどのような行動を見せるのかを明らかにし「共感疲労」「バーンアウト」との関連を明らかにする。第 2 に「バーンアウト」する職員としない職員にはどのような違いがあるのかを明らかにする。第 3 に心理職員は職員に対してどのような支援を行っていけばよいのかを検討する。

研究Ⅰでは直接処遇職員 10 名・心理職員 4 名を対象に行ったインタビュー調査を行い，職員は児童の対応に苦慮しながらも職員同士でサポートし合い児童と関わっていることが明らかとなったが，心理職員は職員のメンタルヘルス対策には積極的に取り組んでいない現状が明らかとなった。

研究Ⅱでは直接処遇職員 65 名・心理職員 6 名を対象に質問紙調査を行った。調査内容は山本ら(2008)が作成した「虐待を受けた子どもの行動チェックリスト(ABCL-R)」を基に作成した問題行動に関する項目 54 項目と，Figley.C によって作成され，藤岡(2006，2008)によって修正された「援助者のための共感疲労/共感満足の自己テスト」から共感疲労の項目を抜粋したもの，久保・田尾(1996)によって作成された「バーンアウト尺度」を用いた。また，個人内要因を測る 10 項目と心理職の役割について問う自由記述欄を設けた。

結果，職員の性別・年齢・勤務年数・担当児童の性別・校種別において「共感疲労」「バーンアウト」得点において有意な差は認められなかった。個人内要因において「完璧主義」($U=395.5, p<0.01$)「仕事とプライベートの区別の曖昧さ」($U=226, p<0.01$)と共感疲労得点，「完璧主義」とバーンアウトと($U=442.5, p<0.01$)の間に有意な差が認められた。入所児童の問題行動は，「よく見られるが対応できる(A 群)」「ほとんど見られないが対応できる(B 群)」「ほとんど見られないが対応しにくい(C 群)」の 3 群に分類することができ，各群の対応のしにくさの得点を算出したところ，A 群と共感疲労得点($r=.416, p<0.01$)，バーンアウト得点($r=.238, p<0.05$)との間にのみ有意な正の相関が認められた。A 群の行動は攻撃性を含んだものが多く，そのような行動は職員側にネガティブな感情を生じさせる一方で，共感的な対応をせざると得なくなることが考えられ，このアンビバレントな感情の処理が負担になっていることが推測された。共感疲労得点・バーンアウト得点，共に 40 点が平均点であったため，40 点以上を得点「High 群」40 点未満を得点「Low 群」としたところ，「共感疲労H群バーンアウトH群」は 26 名(37%)に上ったことに加え，自由記述欄では心理職の役割として「職員もカウンセリングして欲しい」(9 名)と希望している職員が最も多く，職員のメンタルヘルス対策には迅速に取り組む必要があることが示唆された。